
られた大切にして不可欠な存在であり、互いの手を取り合い共に支え合い、約束の未来へと進

新夜 詩希

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染……それは綺羅びやかな出逢いと雅で甘美な思い出に染められた大切にして不可欠な存在であり、互いの手を取り合い共に支え合い、約束の未来へと進み苦楽を分け合いつ掛け替えの無い特別なパートナー……のはず。

【Zマーク】

Z4563P

【作者名】

新夜 詩希

【あらすじ】

昔々ある所に、それはそれは仲の良い男の子と女の子がありました。男の子はプロバスケットボール選手になる夢を、女の子は彼のお嫁さんになる夢を持ち、家族ぐるみで日々健やかに成長して行きました。それから十数年 成長した女の子は男の子の事が大嫌いになつていました。何故なら彼は……何処へ出しても恥ずかしく

ない立派な『』になってしまっていたからです！新夜詩希の思い付き短編第三回。何彈だつけ？青春コメディー小説。長いタイトルは「」愛嬌つて事で。

【幼き口算のプロポーズ】（前書き）

この作品には結構な『偏見』が出て来ます。それに対する罵詈雑言も出て来ます。読んで不快に思う方もいるかも知れません。ご注意下さい。あんまり難しく考えず、肩肘張らずに楽しんで頂けたらば、これ幸いです。

【幼き日暮れのプロポーズ】

ねえ、ううのことはあ.....?』

『よつと。なにいつてんだ、あたりまえだろ！』これからもずーつと、おれがプロのバスケせんしゅになつてもうつひとつといつしょだ！』

『……………。うー、ついやねーへえのじだこかわーーー、おひあへなつたるーへえのねがおあはーなるのーー』

思い出とはかくも美しく暖かく、そして何故こんなにも残酷なものだろうか。しかもそれが印象的であればある程、比例して脳内再生の回数は増えて行き、完全に焼き付いてしまって最早忘れたくても忘れられない領域へと昇華して体験した自分でさえ手の届かない代物となり、改竄や捏造の余地さえ奪つてしまつ。

幼い子供、それこそ一桁程の年齢の子供が発する『結婚しよう』というフレーズにどれだけの意味があるだろう。妙齡の大人が長い恋愛期間の末、緊張と共に囁くその言葉とは覚悟と重みの点で同音異義な程の違いがあるのは分かる。だが思いの強さで言えば全く負けているとは今でも思つていないし、むしろじがらみや打算などがない分、比較にならない程に宝石めいた純粹さを輝かせる。

そう考えればあの日、夕焼けの公園で彼がバスケリングに鮮やかなジャンプショートを決めた後に交わした約束は紛れもなく『プロポーズ』だし、本人同士の口約束とは言え明確に覚えている以上、その効力は失われる事はない。強いて言えば、証となる指輪や書類があるかないかの違いくらいだろう。……それがどれ程、今の私に

遺恨している事か。忘れたくとも忘れられない、『忘れた』と口に出しても所詮己を欺く事など出来はしない。何故あんな事を口走ったのか。何故あれ程までに純粹だったのか。もしも時を遡れるなら、あの瞬間の自分の口を塞いで連れ去つてやりたい。

……いや、それは少し違う。何が違うって、あの日あの時あの言葉を発した私は紛れもなく本心を口にしていた。例え『結婚』という言葉にただ甘いだけの響きしか感じていなくても、幼心に『彼と結婚してもいい』と心の底から思つたからこそその発言だつた。それだけは認めざるを得ない。あの頃の感情を文言するなら、それは單純明快なまでに『恋』。彼はあの頃の私にとつて世界一大切な人だったのだから。

思い出自体は綺麗なものだ。今はどう思つていようが、あの輝かしくも暖かく、こそばゆくて甘酸っぱく、一片の曇りもない宝石みたいな『初恋』の記憶は、私という人物を形作る上で欠かせない重要なピースである事は間違いないし、誰か別の第三者に穢されるのは我慢ならない。では一体、何が変わつてしまつたのか。何があの頃とは同じでないのか。

時も人も、移ろい往くものだ。決してひととこには留まれない。流れ流され、一刻と色を変え形をえて世界を巡り、成長・成熟・精錬を繰り返して行く。それが思春期の子供ならば尚のこと。……そう、実に単純な話だ。あの頃の彼と私は、もうここにはいない。全てが変わり過ぎていて、その変化が劇的過ぎていて、同じ気持ちを持ち続ける事が出来なくなつた。たつたそれだけの事だ。

「オウフwwwwwwあ にゃんペロペロwwwwwwトユクシwww
www」

…………… そうなのだ。十数年の歳月を経た彼は何をどう間違えたのか、見た目から中身から何処に出しても恥ずかしくない程に完璧な『オタク』になってしまっていたのだ

【朝靄煌めくティアプレッション】

静謐。明鏡止水。穏やかに、けれど極限まで神経を研ぎ澄まし、雑念・雜音を小さく小さく折り畳んで体内の一点に集中する。見据える先は28mの距離にある僅か一尺一寸の円形。的の真中、白の印。点。

「…………ふつ…………」

的から視線を逸らさず、短く息を吐く。精神集中、それをもう一段階上に引き上げる為の儀式。排除する為に搔き集めた雑念を吐き出す所作。射の動作に入る前の私の癖だ。この仕草を以て、私は弓と一体になり射を行う為の最適な身体に切り替わる。

足踏み、胴造り、弓構え、打起こしから引分けへ。射法八節を踏襲し、一連の動作を淀みなく組み上げる。この道場に通うようになつた8年前から、万を超える回数をこなして来た動作。そこに不自然さや違和感など何もない。

「…………」

変わったのは精神の方か。出し戻した筈の雑念が再び首を擡げ^{もたげ}る。会に至るその刹那、28m先の的にある見知った顔が映り出した。数年前から、まるでトラウマのように浮かび上がる丸い顔。引分けまでを終え、いざ会に至りうとするその瞬間に発生するトラウマ。無論、実際的に落書きが書いてある訳ではない。それは私の精

神が見せていく幻影なのは明白。……だがどうにも消えてくれないし、引分けを行つた状態では田を逸らす事も出来ない。

「…………ちつ」

礼節を弁えない舌打ち。溢れ出す雑念……というより、怒り。あの顔を見ているだけでムカムカする。他に人がいる時や大会時は流石に自重するが、朝練で道場に私一人しかいない時は遠慮なく打つ事にしている。そしてその勢いで会を成す。やっぱりストレスの貯め過ぎって身体に悪いと思うんですよ、ハイ。

「…………死ね」

ぼそりと発した物騒な言葉と共に、引き絞った弓から矢を解き放つ。離れ。矢を引き絞っていた右手は肘を固定している為、殆ど動かない。代わりに弓を持つ左手が僅かに下がり、矢の行方を見守る為にその道筋を空ける。

ヒュン、という幽かな風切り音。引力に反発し地面とほぼ平行の軌跡を描いて、矢は的あたに中さる。中心点・正鶴せいごくよりもやや上、浮かんだ顔のちょうど眉間を打ち抜いた格好だ。その中り矢を以て、憎々しいトライウマ顔は搔き消える。

「…………やっぱり怒りが原動力じゃダメか。正射必中には程遠いわ

残心もそこそこに、溜息混じりで自らの射を省みる。一応一手四射は皆中。つまり四本放つて全部的に命中したつて事だ。その程度はまあ……私の実力からすれば普通と言つた所。でもその四射全てが微妙に狙いを外している。こんな事がここ数年、ずっと続いていた。アイツの顔が的に浮かぶようになつてから、中りは劇的に増えたが微調整が出来なくなつた。

「うん、今日はこんなもんかな。大会は今週末かあ……。それまでにはもうちょっと調整しないと……」

私は『桜木 梨羽』、17歳。近所の学校に通う至つて普通の高校3年生……とは言い難く、自分の家の真向かいにある『林原弓道場』で弓を習い始めて早8年、大会に出れば全国でも少しは知られる存在になる迄に上達してしまった。元々はここまで入れ込む気ではなかつたのだけど、まあ弓を引くのは楽しいからその辺は結果才一ライ。

ポニーテールに纏めていた長い黒髪を解いて胸当てを外し、手早く後片付けを開始する。……この長い髪と佇まいから『大和撫子』だの『美少女弓道家』なんて見出しで知らない内に雑誌に載っちゃつたりなんかするんだけど、射以外の所で注目を浴びてもねえ……。そりや私だって女の子ですし、褒められれば嬉しいんだけど……何か訣然としない蟠りが残る。

「ん……つと。さて」

一頃りの片付けを終え、朝露で輝く射場の草木を眺めつつ爽やかな気分で身体を伸ばす。服装は既に高校の制服だ。朝練はあくまで朝練、これから女子高生の本分である学校の授業がある。……なんて、そんな殊勝な心掛けではないにしろ、学校は学校で楽しいし友達もいるし、別段サボる必要もない。荷物一式を持ち上げた所で、道場に響く一つの声。

「お早う、梨羽ちゃん。今日も頑張つてるわね

』の林原弓道場の師範代であり私の師匠であり、そして幼馴染の母親である『林原 あかり』さんだ。おばちゃん化が激しい私のお

母さんと2つ3つしか違わない筈だけど、凄く若々しくて羨ましくなる。勿論射の腕前は一流だし、優しくてその上料理も上手、と。……まあ長く接しているだけに短所も知っているけど、その辺は割愛って事で。

「あ、おばさん、お早う。いつもゴメンなさい、使わせてもらつちやつて」

「ふふふ……いいのよ。今更遠慮なんてするんじゃないの。それよりそろそろ朝ご飯よ。早くこいつしゃべ」

「はーい」

私は毎朝、朝練の後にこちらの家で朝食を戴いている。家は両親が共働きでしかも夜勤・早番などが入り乱れて家族の時間帯が安定しない為、朝食だけはこちらの家で食べさせてもらっている。あかりさんは私の家の事情も知っているから、好意に甘えている内につの間にか習慣化してしまったという訳だ。

『道教室は夜間週一回。私も元々はそのあかりさんが教えている教室に通っていたが、高校の弓道部に所属するようになつてからはそちらの練習に重きを置いている。その代わり、と言つては何だけど、朝早くの誰もいないこの時間を掃除と貼り替えと貸出道具のメンテ+を条件に貸して貰える事になつた。早起きは結構大変だけど、一人で集中して練習出来てしかも朝食まで付けてくれるなんて私にとっては至れり尽くせり。そりやあ上達もするつてものです。まあ、完全に良い事ばかりつて訳ではないのだけど……。

先行するあかりさんは振り返り、とも申し訳なさそうに口を開く。

「…………それじゃ、今日もお願ひね」

「…………はーい」

これがプラスアルファの条件。朝の清々しい気分が一気に吹き飛び、陰鬱にさえ反転する。激しく気乗りしないけど、最早『作業』と割り切つて事に臨む。あかりさんと別れ、道場がある離れから少し遠回りして階段を上る。2階の一一番手前の部屋。ここに私の気分を落ち込ませる元凶が住まう異次元が存在するのだ。

「…………」

ドアノブに手を掛けて、一瞬躊躇する。ああ……今日もまたあのおぞましい異空間に入らなければならないのか……。この作業は数年前からほぼ毎日続けていて昔は楽しい事の一つだったのに、今では苦痛の事の最たるもの一つになってしまった。出来れば放棄したい。でも毎朝道場を貸して貰い朝ご飯を食べさせてくれるあかりさんと義雄さんに報いなければ、申し訳が立たない。『この』二人は本当にいい人達なのだ。あ、義雄さんはあかりさんの夫で、この家のお父さんね。至つて普通のサラリーマン。

「………… セテ」

早くしなければ朝ご飯を食べる時間がなくなる。『ヤツ』に付き合つて遅刻なんてまっぴら御免だ。深呼吸して射を行うのと同じくらいの気合を入れ直す。それでもしないと取り込まれてしまふかも知れないのだ。

私は意を決して、異空間へと足を踏み入れた

【混沌盤るアナザーワールド】

「んで wwwwwwんで wwwwwwんで wwwwwwにやーんで wwwwww

「.....」

ドアを開けた途端に溢れ出す毒電波。絡み付くように甘ったるく甲高い歌声。深い意味なんてなさそくな歌詞。無駄にふわふわでキラキラな音の洪水。詳細は分からぬ……というより分かりたくないが、所謂『アニメソング』という類の曲。それが爆音でこの異空間に響き渡っている。

それだけならまだしも、目の前にある醜悪な『物体』はその脳みそが蕩けそうな曲に、自らの濁声をさも嬉しそうに乗せていらっしゃる。ステレオで時間設定した目覚まし代わりのCDを流して、目が覚めた瞬間条件反射のように歌い出すのだとか。……何このモノ生物。

「おお wwwwww梨羽殿 wwwwww毎朝大義でござる wwwwwwドウフフ wwwwww」

「.....」

見渡すのも躊躇われる、色とりどりの髪の色と造形があまりにもオカシイ衣装に身を包んだ可愛らしく微笑む女の子（アニメか何かのキャラクター）のポスターやら人形やら各種グッズで部屋中を埋め尽くし、自身も実際にきわどい格好の女の子っぽい絵柄がプリントされている抱き枕にスリスリしている部屋主。彼は『林原 瑞依』^{るい}

17歳。私の幼馴染であり、今も同じ高校に通うクラスメイト。
そして、何を隠そう幼き日に結婚の約束をした、あの『るーくん』
その人なのである。

だらしなく肥えた腹、お菓子ばかり食べている事による顔中の
ニキビ、手入れする気もなさそうなボサボサの髪など、見た目完全
にテンプレ的『オタク』。バスケット選手を目指していて、それに
違わぬ運動能力と爽やかな笑顔でクラスの女の子の憧れの的だった
あの思い出の中の彼とは似ても似つかぬ今の琉依。正に『どうして
こうなった』という言葉が何の違和感もなく頭に浮かぶ。

「デコフイノプウ www 今日もアーツンまみれの朝でござる www
清々しいでござる www セーイゼーンせんりやくーーーつ www
www

「.....」

普通にイラッとする。片や田の前の肉塊は朝も早よから実に楽し
そうだ。オタクってのはもっと奥ゆかしいものだつた気がするのだ
が。もう人目とか世間体とか私とか人として大事なものを一切無視
してノリノリである。ここまで来ればいつそ清々しい。コイツが私
の幼馴染でなければ、ガン無視決め込んでいる事請け合いだが、
そもそも行かないのが世の中つてものなのだ。沸々と湧き上がる殺意
を隠しもせず、私は作業を遂行する。

「あああああもつ！－－ 朝からウザいわね相変わらずつ！－－
暑苦しいのよキモイのよ！－－ 起きてるなら私が起こしに来る前に
降りて来なさいよ！－－ そつそつやわざわざ！こんな異空間に入らず
に済むのに！－－」

「クポオ www 朝から騒がしいでござるな梨羽殿 www もしゃアノ

田で『じざるか？ テュクシwwwちょーしに乗つちやダメーwww
www

「うがああああああ！！ もうほんつつとイヤ！！ わざと降りて来ないと的に縛り付けて私の射で穴だらけにするわよーー！」

「デュフフ www サーセン www」

「だからそれは何語なのよつ！！ 謝る気ないでしょアンタ！！
とにかく、責任は果たしたからねつ！！ 後は勝手になさいーー！」

ドアを破壊せんが勢いで叩き閉め、一応義務を果たした私は魔窟を後にする。ついでに私のキャラもかなり崩壊氣味だが、アイツと関わる時は仕方がない。……私はそんな凶暴な性格じやないですよ？ ホントですよ？ 一応学校でも『成績優秀で優しく清楚な桜木先輩』で通ってるんですから。そう、全てはあのオタクブタの所為なのですっ！！ 私は悪くないのですっ！！ そこっ、責任転嫁とかゆーな！！

……昔はこうじやなかつたんだけどなあ……。いつから関係がかしくなって、アイツはあんな風に変わつてしまつたんだろうか……つて、実は原因を知つてゐる。そりや曲がりなりにも幼馴染で、今はアレだけどすつと一緒に過ごして來たんだから。知りたくないとも知つてしまつ。

それは3年前の中學3年の夏。琉依は大好きなバスケットボールが出来なくなつた。練習のし過ぎで利き腕の右肘を壊したのだ。剥離した肘の骨の欠片が神経を傷付けてしまつたらしく、アイツは今でも肘を伸ばす度に表情を歪める。その怪我が原因で中学最後の大會にも出れず、自身は勿論、将来を嘱望されていた琉依の故障は周囲にも大きなショックを与えた。

そしてアイツは……全てを諦めてしまった。私の声さえ聞かず、自暴自棄になり、全てを拒絶し大切だった筈のものさえ投げ出して、自分の殻に閉じ籠ってしまった。

……その時にハマッてしまつたのが、『アニメ』を筆頭とした一次元の世界。現実逃避するには格好のコンテンツだったとは言え、所謂サブカルチャー産業に手を出した琉依は怪我をしてから数ヶ月足らずで誰から見ても分かりやすい立派な『オタク』へと転身を遂げたのだった。元々前向きで熱中しやすい性格が裏目に出ていたようだ。自室に引き籠もり、お菓子を食べながらアニメやゲーム、マンガ三昧。確かに怪我をした当初の、あの全てを憎んでいるような殺伐とした雰囲気はなくなつた。なくなつたのだけど……私から言わせれば、あんな風になつてしまつた琉依は正直見たくなかった。

私がつきつきりで彼を更正させていれば、少しさは違つたかも……と今更悔やんでも仕方がないけど……いや、まあ、私も私で思春期の悩みだと女子間のしがらみ（ヒント：バスケをやつていた頃の琉依はモテモテだった）だと色々あつたもので、『るーくんも辛いだろうし、今はそつとしといてあげよう』とか体の良い放置をしてしまつた訳でして、はい。……こんな風になつてしまつた事が分かつていたなら、そんな余計なものは全てうつちやつても琉依の傍にいたものを。気が付いた時には既に遅く、もう手の施しようがない迄に変わつてしまつていた。開口一番、

『長 は拙者の嫁wwwデュクシwww』

とか言われた時は全く理解出来ずに一体何の病氣かと頭の中が真っ白になつた事を覚えている。……未だに琉依の喋る言葉は何かの暗号かとしか思えないけど。

かくして琉依は推薦入学が決まつて行った高校が怪我の所為で破談になり、今は私と同じ地元の公立校に通つている。私は弓道場に通

つて いる事も あり 結局『幼馴染』という立場を無視する事も出来ず、あかりさん達に頼まれるがまま今もこうやって毎朝練習後に琉依を叩き起こす生活を続けていた。……あ、正確には私が起こす前に起きているから私が起こしている訳じゃないけど。

昔、琉依が変わる前まではあかりさん達に頼まれるまでもなく毎朝自主的に琉依を起こしに来たものだ。そりや……家は近くだし同じ学校に通ってるんだし、結局一緒に学校行くんだし。それに……琉依の寝顔が……まあ……その……。あ、でも今は気持ち悪いの1フレーズしか浮かばないけどね。

…… そう、何が嫌って、私は『オタク』という生き物が心底嫌いなのだ。ああやつて性格が変わつて罵詈雑言を怒鳴り散らしてしまう程に。アレが『結婚の約束までした大好きな幼馴染のるーくん』であるという事実に目を覆いたくなる。到底理解出来ないし、理解しようとも思わない。いくら相手が琉依とは言え、否、相手が琉依だからこそ許せない。私の運命の人は、問答無用でカツコイイ王子様であるべきなのだ。……何処かの『付き合つてないけど付き合つてるようにならぬ』幼馴染カツブルとは大違ひだなあ……。作者……もとい、世の中つて理不尽。

そんなこんなで、今日もいつもと変わらぬ一日が始まった

【悲嘆渦巻ヘフレイクワースト】

「おお、お早う梨羽ちゃん。今日も朝練頑張つていたようだね」

「あ、お早うおじさん。毎朝騒がしくて『ゴメンなさい』

「ははは、いいんだよ。梨羽ちゃんだつて僕の娘みたいなものなんだから。遠慮なんてするもんじゃない」

「ふふふ……貴方はいつも梨羽ちゃんには甘いんだから。娘を産んであげられなくてスミマセンでしたねー」

「そ、そんな事言つてないじゃないか。全く、母さんは何年その事で責めれば気が済むんだろうねえ……」

「あははっ、仲のこい証拠じゃなし。あ、私も手伝つよ、おばさん」「いいから座つてお父さんの相手でもしてなさい。あとは並べるだけですからねー」

「はーい。朝練したらお腹減つちやつた」

「朝から元氣いいね。母さんの料理が美味しいからつべ食べ過ぎるとなんだからねつ？」

「太るよ」

「おじさんつ、女の子にそんな事言つたらホントなら嫌われりやうんだからねつ？」

「ははは、スマンスマン。梨羽ちゃんに嫌われてはショックで寝込

む事に……」

「ドゥフフ キタコレ ネ申スレに遭遇してしまったと言
わざるを得ないで」ざる ハハハニツ ポオ ワワワ

『』
.....

朝食の時間を迎える林原家のダイニング。爽やかで微笑ましい家
族の会話（私は実子じゃないけど）を展開しているにも拘らず、そ
れを携帯眺めてニヤニヤしながら独り言を呴いている一派の巨オタ
がブチ壊す。空気ブレイカーのスキルは日本有数かも。

いつも通りの朝食を開始したはいいけれど、林原夫婦と会話する
のは専らご近所さんの私で、当の息子は会話に参加どころか携帯を
注視しているだけで目を合わせもしない。それだけならまだしも、
変な独り言で空気を破壊に掛かつたりもする。これならいっそ居な
い方が気楽なのだけど……自分の家でもないのにそんな事を申言出
来るほど偉くなつた覚えはない。

「フォカヌボウ 挙者は激しくニヤリを所望で」ざる ワ

『』

だから何語だそれは。知り合いにこんな異次元言語使いはいない
筈なんだけど。

「みwwwなwwwぎwwwつwwwてwww来wwwたwww
ワ

もうツツツコミ入れるのもバカらしい。いつそ本当に射の的にでも

括りつけてしまおうか。一、三射撃込んでジエノサイドしてみたら、むしろそこから脳がクラッシュの初期化して正氣に戻るかも。……うん、試す価値はあるかも。

などと瓶に封をす物騒な計画を立てて居る。

「ああああああつ！！ 何でこんなキモイ子に育つちやつたのかしらああ！？ 私の育て方が悪かったのかしらああああ！？」

これまたいつもの病気が始まつた。題して『息子の莫迦さ加減を呪う狂氣の母親症候群《ママンクレイジーシングドローム》』。あかりさんがこの小説の不条理……もとい、一次元にドハマリしあつちの世界から帰つて来ないバカ息子のキモグロぶりを嘆き憂いて発狂してしまう、1日に数回の頻度で発作を起こす謎の奇病である。回復の兆しは今の所ない。まあ病原も回復法も分かり切つてはいる訳だけど。自分の息子をキモイ呼ばわりとか流石にどうかとも思うが、これがまたガツツリ同意出来てしまうから始末が悪い。あ、育て方云々はあかりさんに責任ないと思つよ、うん。

「まああんなに可憐かつたのに……」
「こんなキモイやつが梨

回じテソシヨンでさめざめと泣き崩れるキモオタの女。『安心だ
されい、ハトナの嫁に貢う氣は毛頭御座いませぬ。

「オウフ WWW 今日も母上は荒振つじざるな WWW 鷹でじざるか WWW? 鷹でじざるか WWW?」

私のキャラ崩壊も結構なはずだけど、この御方には敵わない。若々しくて家事も上手く、射も一流と非の打ち所がないかのように思われていたあかりさんにも、かような欠点が存在するという有り難いお話。取り敢えず、そのフレーズはマズイと思いますよ、あかりさん。

「はつはつは、今日も朝から一人とも元気がいいなあ。会社勤めでストレス満載の僕としては羨ましい限りだよ。少しその元気を分けて欲しいくらいだ」

ものつそい他人事のように、田玉焼きを食べながら義雄さんがのんびりと発言する。田玉焼きに梅ドレッシングという通なんだか味覚障害なんだか分からぬ食べ方で、優雅に朝食を嗜んでいらっしゃっていた。……この人の動じなさもかなりのものだ。最早達観の領域だろう。

「…………。んまあ、いつもの事ではあるけど。いい加減頃合い見計らつて何とかしないと不味くない？ おばさん、その内自我崩壊しかねないんじゃ……」

「大丈夫大丈夫、母さんのヒステリーは今に始まった事じゃないし。生理現象みたいなものだよ。山を越えれば落ち着く。そして何より、見てて面白いじゃないか。止めるなんて勿体無い」

あつはつはー、と快活に笑う中年タヌキ。そのおおらかな性格と意外な……と言えば失礼だけど、卒のない仕事ぶりで会社では管理職として一目置かれているらしい。この人達の馴れ染めってどんなんだろうか。凄く興味があるけど、未だに訊いた事がない。あのおばさんとこのおじさんの事だ、きっと一癖も二癖も、もしかしたら異世界冒険譚辺りにまで発展しそうな程面白い馴れ染めに違いない。

今度折を見て根据り葉掘り話をしてやるつと。

「ええ……そりゃあ逢いたくて逢いたくて震えるつてなもんよ……。タマシイぐらいレボリューションしちゃうわよ……。そうでしょう？ だつて魔法の言葉で楽しい仲間がぽぽぽぽーんだもの……。ムスコでじょうか？ いいえ、ヲタクです。…………ブツブツ…………ガガ様ブランボー…………」

「ヌポオ ウウウウこれまた良スレでござるウウウこれは全力で保守せねば ウウウウウ」

「「」駆走様でした。おじさん、私今日口直でもう出なくちゃいけないから、片付け頼んでもいいー？」

「了解。行つてらつしゃー、梨羽ひちゃん。勉強頑張つておいでー」

色々とツッコミ所は多いけど、これが私の日常だから仕方がない。さて、今日も一日頑張りますか

【類友集まるクラスルーム】

「おーう林原。今日も相変わらずデカキモイなー」

「オウフwww片瀬氏wwwお主こそ相も変わらぬ辛辣っぷりでござるwww稀代の人形師の腕も健在でござるかwww?」

「まあなー。昨日も一体完成させひまつたぜ。ふつ、自分のゴッヂハンドぶりがあまりにも眩しい……!…」

「おおwwwこれは良いセリア坦んwwwペロペロwwwとこりで片瀬氏、今期は何をチェックしているでござるwww?」

「クワーゼ、ロウ ゆーふ、ピンド、 およろ辺りは安心のブヒアーメだな。音たん可愛いよ湯たん。あと個人的にはタバニがファイギュアマスターとしての腕を疼かせてくれるってトコが」

『…………』

所変わつて、私の通う某県立高校の3年2組。日直として相方と朝の雑務をこなしていた私の耳に届いたのは、異次元の会話だった。始業前の清々しい空気を台無しにするのはキモオター一名。片方は言わずもがな、もう片方はこのクラスで唯一そのアホウと同等の会話を展開出来る自称『稀代の人形師』『ファイギュアマスター』『ゴッドハンド』こと『片瀬信一』。私からすりや只のオタクだ。クラスでも爪弾き者……という程ではないが、皆極力関わり合いを避けている感じ。まともに相手をするのはせいぜい一人しかいない。上

記の会話が完全に意味不明だったその貴方、むしろ正常なので安心を。

因みにこの片瀬、以前何処かで何かにちょっとだけ出演経験があるのだが……それはまた別のお話。『何で突然そんな地味な所を……』『時系列的に有り得なくね？』『それだつたらメーティを出せ』などのツッコミは受け付けませんので悪しからず。

「……全く、わざわざ教室とする会話じゃないでしょ。気持ち悪いったらないわ。ああいうアホって一体何考えて生きてるんだろ。せめて目の届かない所でひつそりやつてれば関わりなくて済むのに……ブツブツ……」

「……相変わらずうねうね毒吐いてるねー。幼馴染クンがオタ化しちゃった事、未だに根に持つてるんだ？」

「つっさいわね、アンタには関係ないでしょ、//。せつせとそつちの仕事も終わらせてよ」

「はいはーいと。『成績優秀で優しく清楚な桜木梨羽』が聞いて呆れる毒舌ぶりだこと。ファンの口達につづかり暴露してみたいわ

「(+)自由に。そんな事されても痛くも痒くもないから無駄よ」

「そうねー、むしろその隠れドS気質はマニアにとってや(+)褒美みたいなもんだからねー。そつち系の新規ファンが急増したりして。うん、それはそれで楽しそう」

「…………はあ」

掲示板のお知らせプリントの張り替えをしながらカラカラと笑う

相方のテキトーさ加減に嘆息しつつ、教室の観葉植物への水やりを終えた私は未だ謎トークを楽しげに展開しているキモオタコンビをチラ見して、これまた嘆息一つ。ここ数年間、この友人やアイツの所為でストレスの溜まり方が確変しているみたい。

相方こと『新海 愛美』^{にいみ まなみ}は私の親友。小学校からの腐れ縁で同じ弓道部に所属し、日々切磋琢磨している間柄もある。しかも彼女は部長。射は私の方が中てるけど。琉依ほど長くはないが、昔馴染みという事もあり私達の内情をある程度知っている数少ない人間だ。美少女然とした、ものすごく可愛らしい名前とフワフワ系の容姿に反して、楽しい事大好きなあつけらかんとしたケセラセラキャラの彼女。名字と名前の両方に『み』が入っている事から、小学生の頃に誰かが付けた『ミミ』という渾名が今でも通称になってしまっているのだ。

昔は恋愛なんて面倒くさくて面白くなーい、なんて言つてた彼女にも、豹変する瞬間が訪れるようになつた。それは……

「よつす、いつもながらカオスなトーク繰り広げてんなー、オタコンビ。朝から空気が濁んでんぞ」

「おおwww藤堂氏www椅子を使わせてもらつていで」^{とうとう}「わわ今空ける故、しばし待たれい（ビシッwww」

「おーう秋臣。^{あきおみ}今日は珍しく結構早いな。雨でも降るかね?」

琉依が座っていた片瀬の前の席の本来の所有者、『藤堂 秋臣』の登場。あのキモオタコンビにちよつかいを出すクラスでも稀有な存在だけど、それはどうも個人的な利害が一致している為であるっぽい。

顔・成績・運動神経共に至つて普通の特筆すべき点が見当たらぬいこの藤堂。あるとすれば割と家族思いだという噂と、あの隔離指

定人物共の相手を臆する事無く出来る点くらいか。同レベルでのキモオタトークを開拓している所は見た事ないけど、何か妙にウマが合つ感じは見受けられる。

因みにこの藤堂、何処かで何かの作品の主人公だったたりした事があつたらしいけど……それはまた別のお話。『だから何で突然そんな中途半端な所を……』『だから時系列的に有り得ないだろ』『だからそれならメーティを出せと何度も』と言つたツッコミは受け付けませんので悪しからず。

「うつせえ。オヤジが今日から出張で朝の支度させられてたんだよ。その影響で早起きしそぎちまた。……ところで信一、例のブツ手に入ったか？」

「おう、アレな。手に入れるのに苦労したぜー！」

「ドゥフフ WWWアレでJざるか WWW? アレでJざるか WWW? フオカヌプウ WWW拙者にも回して欲しいでJざる WWW」

教室の一隅で何やら怪しげな取引をする人間レベル的平均点未満トリオ（普通一人、ダメ人間一人でブツチギリ平均未満）。どんなに非人道的なシロモノであれ内容物を確認すればドン引き確定なので、わざわざ暴いてやる必要もあるまい。そんな行為は精神衛生上不要だ。射で遠距離攻撃を試みたい所でもあるのだが、そんな事したら矢が穢れそう。

……そななおどろおどろしい毒の沼地みたいな光景を、何故かキラキラした瞳で見つめる乙女が一人。

「ねえねえ、藤堂くんつてカッコ良くない？」

私の相方、美少女新海さんが理解不能な台詞を吐いて、頬を染め

恋愛なんて面倒くさいくて面白くないのではなかつたのか。世の中つて分からぬ。

「はあ？ どう McConnell に見たつて普通でしょ？」自分でもそう認めてるし。アンタがオカシイんじゃないの？」

「そんな事ないってえ～　絶対カッコイイよお～　よじつ、今
田は部活も早く終わるし、一緒に下校出来るように誘つてみのっ！
あたし、頑張るよお～ーーー。」

[REDACTED]

……これは誰だ。こんな甘つたるい声を出す親友は知らない。何でこう、私の昔馴染みは人格変貌が激しいんだろうか。昔は皆可愛かつたのに。世の中つて理不尽。はあ、と溜め息一つ。色々と物申したい所ではあるが、人の恋路を邪魔するほど野暮ではないつもりだ。私に迷惑をぶん投げて来ない程度なら好きにすればいい。

私は快晴の青空に目を眩ませつつ、再び大きな溜め息を吐き出し
た

「……ね、ねえ、藤堂くん」

「あー?
何だ、新海か。どうした、オレに用事なんて珍しいな」

「う、うん。えっと……あのね？ 今日……部活が早く終わるんだ。
もし良かつたら……その、少し待つて……くれないかな…………？」

「何でオレが待たなきやなんねえんだ？」
「ああ、そうか。
そういう事か。もしかしてお前……」

「えっと……その……出来たらでいいんだけど……あ、あたしと一緒に帰つ……」

「オレに口直の仕事押し付けようつて魂胆なんだろ。全く、幾らオレが暇そだからつて自分の仕事を他人にやらせようとか図々しいにも程があんぞ」

」

「あれ?
どうした新海?
黙りこくつちまつて」

「藤堂くんの」

「……ん?
な、何か妙な既視感じみたものが

「……ええええええええええええええ！」

【繰り広げる弓矢セントレーшибون】

「…………」

ヒュンツ カツ

放課後。風を薙ぐ感触が頬を撫でる。部活に参加している私は、一心不乱……とは少しニコアンスが違う気がするけど、それに似たような感覚で弓を引き続けていた。

「…………」

ヒュンツ カツ

的を見据えて、弓を引き、撃ち放つて矢の行方を見守る。一定のリズムで同じ動作を繰り返す。弓は最早私の一部だ。そこに淀みなどある訳がない。……いや、むしろ私が弓の一部になってしまっていふような気さえする。上手く引けるならどうやらでも構わないが。

「…………」

ヒュンツ カツ

「おい……今日の桜木先輩、何か変じゃね?」「ああ、心ここに在らずつて感じだな……」「その割に的中率がハンパねーけど……」「うん、今の所全部中てる」「スゴすぎだよ、桜木先輩……」「相変わらず綺麗な射よねえ……惚れ惚れしちゃうわ

雜音が耳に入らない。自己に埋没し過ぎると外界とは別次元に精神が隔離されてしまうのか、バカの一つ覚えみたいに機械じみた動きで身体が射だけを繰り返していた。

「…………

ヒュンツ カツ

的に浮かぶ顔。幼馴染の顔。神経を逆撫でし、心を粟立たせるキライな丸い顔。僅かに残る昔の面影が、より一層憎々さを引き立てる。

ギリ、と音を立てたのは矢を番える弦か、それとも私の歯か。ザワザワと鳴動する夜の森のように、昏く深く閉ざされて行く。

「…………

ヒュンツ カツ

私は琉依にどうして欲しいのだろう。琉依がどうなつて欲しいのだろう。昔の、私が大好きだつた頃の琉依に戻つて欲しいとは思う。それが最上の願い。あの頃の琉依と今の琉依では全くの別人だ。あんな琉依は見ていたくないし、到底許せる範囲のものではない。琉依だって、今のカツ「悪いオタクな自分よりも昔の輝いていた頃の自分がいいと思つてゐるに決まつている。

「…………

ヒュンツ カツ

でもそれって……私の一方的な願望でしかない。確かにケガをしてもうバスケが出来なくなつたという事情はある。が、今の自分を形作つたのはあくまで琉依本人だ。そこにどのような葛藤があつたのか、苦悩があつたのかは琉依本人にしか分からぬ。私が思つてるのは、今の琉依を認められない反抗心から来る願望に過ぎない。

「…………」

ヒュンツ カツ

一般論的に言えば、誰からも敬遠されるオタクな今よりも昔に好かれていたスポーツマンな昔の方が良いと思うのは当然の事だろう。誰だつて、嫌われるより好かれたいのは当たり前で悪い事じやない。けど、それはあくまで一般論。そうは思わない人もいれば、自分がなりたい自分になれない人だつて世の中にはいっぱいいる。簡単に変われるなら誰だつて苦労なんかしない。

「…………」

ヒュンツ カツ

なら……私は？ 私はあの頃と変わっていない、あの頃理想としていた自分に成れでいるど、胸を張つて言えるのか？ 変わつてしまつた友人達を蔑んで『昔はこうじゃなかつたのに』と嘆く私は、本当に自分だけは昔のままだと、自分だけは改悪していないと切りつてしまつていいのか？

「…………」

ヒュンツ カツ

違う。私は違う。私は琉依とは違う。今だつてこいつして、明後日に迫った大会に向けての練習を積んでいる。高校卒業した後も弓道を続けるかどうかは決めていないけど、次の大会は高校最後だ。ここでベストを尽くせなければ絶対に一生後悔する。

「…………」

ヒュンツ カツ パキッ

……そうだ、私には『道がある。私が私である為の大きな因子。弓を引いている私は紛れもなく『桜木梨羽』だ。8年、数え切れない程の回数と時間を積み重ね、色々な人に認められるくらいには成長した弓道家としての私。それは唯一無二のアイデンティティ。それを失くす事は私自身が選んで歩んで来た道のりを否定する事に他ならない。私は琉依とは違う。バスケを失くしてしまった琉依とは違う。……違う。

「…………」

ヒュンツ

「…………？」

ふと、今までとの感触の違いに違和感を覚えて我に返る。目に映るのは一十本以上矢が刺さって最早体裁を成していない的と、的に届きさえせず芝生に転がっている矢が一本だけ。どうやら今の一射は打ち損なつたらしい。……あれ、緩んじやつたかな？ 少し集中を欠いていたみたいだ。反省反省。

「…………ちゅうと、」の指でさしたのよ梨羽ー?」

「…………え?」

射位に戻ろ!とする私を部長の///が血相変えて呼び止める。あ、いたんだ!!!。声が大きいなあ。藤堂とは上手く行ったの?つて訊いてるのよー!」

///が私の右手を掴み上げる。そこには……

私の指を真紅に染め上げる、奇妙な赤い液体が付着していた

「え?…………え?」

「中島クン、救急箱持つて来て!! 大至急!!」「は、はい!!」「それより保健室に連れて行つた方がいいんぢや……」「うわっ、スゲー血が出てますよ先輩!!」「何でアンタは『懸も着けず』に『引いてんのよ!! これじゃ爪割れて当たり前でしょ!!?』」「…………どうしよう、桜木先輩が抜けたらウチの部、勝てっこないよお…………」「バカっ! 今は大会の事なんて考えちゃダメだよ!!」

部員達が慌ただしく私の周りを走り回る。…………え、ちょ……ちょつと待つてよ……。私が抜けるつて何の話? 皆何をそんなに焦つているの? だってこんな痛くも痒くも……ちょっと手が汚れち

やつただけ……

ワタシハ、マダイクラガテモ、コニヨヒケルツテバ……

「とにかく、保健室に連れて行くから。ほら、ボケつとしてないで
ちやんと着いて来て！！」

思考が追いついて来ないまま私は『弓を取り上げられ、///に引き
摺られるよつにして弓道場を後にした

【零れ碎けるメンタリティ】

「特に大きなケガではないわ。下手に構わなければ数日で痛みも引くし、爪が生え変われば傷もキレイサッパリ消える。……でも明後日の大会は無理ね。少なくとも一週間は弓を引いちゃダメ」

「…………」

連れて来られた保健室。目の前に座る、確かに『艶夜』とか言う名前の女医は手早く処置を終えた後、私にそんな事を告げた。

……この人が何故こんな事を言うのか分からぬ。こんなのは大したケガではない。包帯でぐるぐる巻きにされているでもなく、ケガをした右手親指を消毒し軟膏を塗つてガーゼをテープで固定してあるだけ。痛みだつて殆ど無いし、今は血すら滲んでもいない。なら……大会は出られる筈だ。

「……待つて下さい。この程度ならやれます。ほら、全然痛くなんかないし」

私は右手を振つて笑顔を見せる。一瞬チクリと痛みが走るが、そんなんものは無視だ。

「ダメだつて言つてはいるでしょ。今無理をしたら傷の治りが遅くなるわよ。確かに今後二度と弓を持てなくなるような大ケガではないけど、そんなまともに力の入らない指でまともな成績を修める事なんて出来ると思つてはいるの？　ただでさえ弓道は纖細な力加減が要求されるというのに」

「…………」

保険医の言葉は正論だ。正論だからこそ、救いがない。何しろ……次の大会は高校最後なのだ。これに出れなければ今まで積み重ねてきたものが全て瓦解すると言つても過言ではないのだから。なのに保険医は出るなど言つ。私の努力を全て無に帰そうと辛辣な言葉を投げ掛ける。

頭の中を絶望感と焦燥感が入り混じつて駆け巡り、それは今まで積み上げて来たものが崩れ落ちた所に堆積して精神を圧迫する。爪先から少しずつ力が抜けて、気付けば私は床に尻餅をついていた。保険医も付き添っていたミミも、居辛そうに頭を伏せる。……憐みや同情なんか欲しくない。ないのに……。

積み上がり切つた絶望感の頂に、何故かアイツの顔が浮かぶ。
…………ああそうか、今の私つてあの時の、中学最後の大会前にケガをしてバスケが出来なくなつた琉依と殆ど同じ状況なんだ。悔しさと切なさが涙となつて零れ落ちる。

…………でもお陰で、少しだけ琉依の気持ちが分かつた気がする。安易な憐憫や同情は慰めにもならないし、逃げたくなるのも理解出来る。そして同時に気付かされた。…………今まで自分が、どれほど琉依を見下していたのかを。

「…………ごめん!!!!、今日はもう帰るね。練習出来ないなら居たつて仕方ないし」

私は力の入らない足を無理やり立たせて、ヨロヨロと出口に向かう。

「梨羽……元氣、出してね。付いて行かなくて大丈夫?」

「うん、大丈夫。ありがとね。……でもちょっと一人にしてくれる？」

「あつ、うん、ゴメン。じゃあ私は道場に戻るから。……あんまり思い詰めちゃダメよ？」

「分かってる。心配しないで。……それじゃあね」

結局一度も振り返らずに、私は保健室を後にした

「あ、いたいた林原。ちょっとといい？」

「おおwww新海嬢でござるかwww拙者に用とは随分と珍妙なwww明日は豪雨で」やれりwww

「えーっと……と、藤堂くんは……？」

「藤堂氏ならば帰宅されたでござるwww何やら事情も分からぬ不思議そうな表情をしておったでござるがなwww拙者ではなく藤堂氏に用だつたでござるかwww? ヌポオwww」

「そ、そり……って、用事はそっちじゃなくて……えっと、アンタ梨羽の近所でしょ？ 悪いんだけど、梨羽の荷物を家に届けてやつて欲しいのよ」

「オウフ www 梨羽殿がどうかしたで『ざるか www ? ケンカで『ざるか www ? ケンカで『ざるか www ? 他人の修羅場はメシウマで『ざるか www ?

「……アンタ相変わらず得な性格してるね……。ケンカじやなくて、ケガよケガ。梨羽、部活中にケガしちゃつてね。……明後日の大会にも出れなくなっちゃつたんだ」

「www。マジ？」

「マジ、よ。あの『は部で一番中てるから、部長としては冗談であつて欲しかつたんだけど……あ、でも心配しないで。ケガ自体は大した事はないから。ちょっと箇所が悪かつただけ。てか自業自得ね。弓懸も着けずにあんな無謀な射を繰り返してたんだから。爪くらい割れて当然というか何というか、むしろ爪程度で済んで良かつたというか。』弾いた時の衝撃つて結構凄いから、下手すると指の骨が折れちゃつたりするんだけどね」

「.....」

「あたしはそつとしておく事しか出来ないけれど……アンタからは言える事があるんじゃない？ アンタが本当に『林原琉依』であるのなら、ね」

「.....」

「それじゃ、あの『を宜しくね、『幼馴染』クン』

「……………『幼馴染』、か
」

【在りし過去とのエンカウンター】

「おい！ 誰か早く監督呼んで来い！！」

あれは忘れもしない3年前の夏の日、サウナのようになに蒸し暑い体育馆での出来事。オレは夢が碎ける音を聴いた

疲労性剥離骨折。

そんな言葉が耳に入つて来たのはそれから数時間後の、病院の一室だつた。その間の記憶はない。試合形式の練習でハーフライン手前でパスを受け、一人目をクイックフェイントで置き去りにし、二人目をターンでかわし、壁パスを受け、三人目をショートフェイクで抜き去り、完璧な体勢でショートモーションに入った所までは覚えている。だがそれから後の、あの奇妙な音が聴こえた瞬間から診察室で聞き慣れない単語を耳にするまでの数時間は消しゴムを掛けたようにキレイさっぱり抜け落ちている。

予兆はあった。練習中、右肘に軋むような痛みが走るのはさほど珍しい事ではなかつたが、そんな痛みに構つてられなかつたのと認めたくなかったのが半々。結果、限界を超えてしまつた。……まさかよりによつて他でもない自分の身体が自分の努力を裏切つてくれようとは。

確かに幼い頃からろくなコーチも付けず、ボールを追い駆けていたオレのショートフォームは肘の使い方に独特な癖があつたらしい。だがそれでも入つてしまつたのだから仕方がない。上手く撃てないのなら改善の余地もあつただろうに、オレはどうやら他の人よりも少し才能があつたらしく、自分のショートフォームに疑いを抱かなか

つた。

骨折自体はそう重いものじゃないらしい。ただし問題なのはそこ
じやなかつた。剥離骨折というのは骨が密接する筋肉や腱から剥が
れる、文字通り『剥離』する事で起くる。通常なら軽くて全治3ヶ
月と言つた所だ。……だがオレのそれは普通とは少し違つて、骨が
剥離した際に僅か数センチの欠片が発生。そいつが運悪く肘関節の
神経を傷つけやがつた。この所為でオレの右肘はもう今まで通りの
動きが出来なくなつた。

今でこそ日常生活に支障ないレベルまでは使えるようになつたも
のの、ちょっとした荷物を持ち上げる時や腕を頭上に伸ばす時なん
かは痺れや鈍痛が走る。当時で言えば、指一つ動かすのさえままな
らない。そんな状態でバスケなんて夢のまた夢だ。バスケに全てを
つぎ込んで来たオレにとつて、死刑宣告も同様。あの時壊れたのは
骨なんかじゃなく、オレの夢そのものだつた。

それからのオレは……まあ想像に難くないだろう。自暴自棄にな
つて荒れに荒れて、今思い返してもバカな事ばっかりやつていた。
両親や友達、梨羽にも散々迷惑を掛けた。そりやあ梨羽だつてオレ
と関わるのは避けるだろう。

……実の所、少しでも梨羽に励まして貰えれば、なんて情けない
事を心の何処かで考えていたりもした。梨羽ならオレを元気付けて
くれるだろう、なんて自分勝手な淡い期待を抱いていた。……しか
し実際は、会話らしい会話なんて殆どなかつた。たまに会つても妙
によそよそしく、田だけが憐れみを伝えて来る。そんな梨羽の視線
や態度がオレの精神を粟立たせ、苛立ちや自閉に拍車を掛けた。
……いや、他人の所為にするのは良くないな。それはオレが弱かつた、
バカだつただけの話だ。梨羽に責任なんて一欠片もない。

暴れ散らすのも飽きた頃、オレは何気なくTVでやつていたとあ
る番組に心を奪われる。それはオレが今までバカにしていた、所謂
オタク御用達の『アニメ』だった。小さなTVの中で展開する、色

鮮やかな世界。個性的なキャラクター達が共に協力し困難に立ち向かい、時に笑い、時に悩み、そしてくすぐったいような恋をする。空っぽだったオレには、その全てがたまらなく輝いて見えた。

それからアニメやラノベ、マンガにのめり込んだオレはまるで憑き物でも落ちたかのように、落ち着きを取り戻し穏やかな性格になつた。……まあ、梨羽や周囲からは『染まり過ぎ』との声もあるが、オレはこのアニメや一次元に囮まれた今が楽しくて仕方がない。話の合う友人もいるし、あの黒歴史のように意味もなく苛ついたり常にストレスを貯めていたりする事もない。アニメに出会えて、オレは救われたんだと言つても過言ではないだろう。

……そう、こんな経験をしているオレだからこそ、今の梨羽は放つては置けない。今はどうであれ、オレは結局の所ケガを理由にバスケから逃げたんだ。そこで腐らずリハビリに尽力して、バスケを諦めなかつたらまた別の人生があつただろう。だがしかし、周りから見たら今のオレは立派な爪弾き者だ。落伍者と言い換えていい。確かに後悔はしていないし納得もしているが、梨羽にオレと同じ道を辿つて欲しいかと言えばそれは断じてNOだ。

梨羽は眞面目で人望も才能もある。それが潰れてしまうのが勿体ないと思うかどうかは梨羽次第だし俺がどうこう言えた事ではないが、梨羽は強く見えて意外と脆い。最後の大会に出られなくなつてしまつたという今回の件で立ち直れなくなる可能性は、オレの見立てではかなり高いよう思う。それも時間の問題だろう。

……こんなオレが果たしてどの程度の事をしてやれるのか、全然分からないし自信もない。だがオレにしか言えない事、オレだけにしか分からない事はきっとある。……新海に諭されたってのは少し情けないが、梨羽がピンチの今、形振りなんて構つていられない。

……そう、何故ならオレ達は『幼馴染』なんだから

【心に小さなスートペイン】

『…………ふつ…………』

精神集中。それを更に一段階引き上げた私は、弓と渾然一体になり新たな領域へと足を踏み入れる。自身の能力、弓の性能、過程と結末。それら全てが手に取るように分かり、同時に全てが私の支配下となる。この一射は間違いなく中の。自信ではなく確信だ。予め決められていた事を再現するだけの単純作業。そこに疑いの余地などある訳がない。

この一射が決まれば、全国優勝。練習と努力の全てがこの一射で報われる。気負いはない。心に満ちるのはむしろ楽しさ。外す筈のない弓を引く事に、楽しみを感じない道理などない。研ぎ澄まされた神経は刃の如く、的を見据える瞳は鷹の如く、操る指は機械の如く精密さを増して行く。定められた結末に向かつて、時が動き出す。

『…………つ…………』

矢が解き放たれる。風切り音を纏い、引力に反発して、文字通り一直線に滑空する。予定通りの進路を描き、予定通りの位置に中る。タン、と小気味良い音を立てて、矢は納まるべき正鵠に突き立つた。

『やつたわ梨羽――――!』『つおおおおおすげえッスよ桜木先輩!――!』『やつてくれるって信じてました――――!』『きやあああセンパイカッコイイ――――!』『ぜ、ぜ、全国制覇なんて夢みたい……!――!』

喝采は雨のよう。降り注いでは染み渡る。溺れそな程の歡喜の中で、積み重ねた努力も選んだ道も間違いではなかつた事を再確認した。……ああ、何て素敵な気分。私は遂に成し遂げたんだ。これがもしも夢なら、いつそ永遠に醒めないで欲し

「ドウフフ www それは残念ながら夢でござる www 萬才チとはかくも共達者でござるな梨羽殿 www 現実逃避乙 www 」

聞き馴れた変態の声で現実に引き戻される。勿論そこは弓道場でもなければ大会中でもない。歓声の渦中にいた筈の私は、その実、自室のベッドで不貞寝中だつた訳だ。……うーわー、私つてば痛いと、それよりも重要な事が……

「あ、あ、あ、アンタが何で私の部屋にいるのよおおおー?」

私を現実へ引き戻した声のバ力主に怒りの矛先を向ける。ついでに弓を引き絞り鎌も向ける。

「クボオ WWWケガを負つて いるとは思えぬバイタリティで『J』ぞる
WWW 部活禁止されたのに』を引いてはいかんじ』れる WWW『J』ぞ

「やかましいいいいいいい！……避けるんじゃないわよ、今その狂

つたドタマに射あづち込んで……いつつたあああ……！」

指に走る鋭い痛みで怒りが冷める。勢いで弓を引いたら傷口が開いてまた血が滲んでしまった。ガーゼが赤く染まり、嫌な色が浮かび上がる。うづ……悔しい……。弓が引けないのも、このバカにそれを見られたのも。

「……何しに来たのよ。もしかして大会前にケガしちゃった私を笑いに来たの？ そうよ、大事な最後の大会前にケガしちゃったのよ私は。滑稽でしょ？ 笑いなさいよ。バカだつて笑えばいいじゃないのよ」

私はベッドでクッショוןに頭を埋めながら、自虐に自虐を重ねまくる。

「と、取り付く島もないで！」
ざらんwwwホレ、新海嬢に頼まれて梨羽殿の荷物を学校から届けに馳せ参じた次第で、「やざるwww」

「あ……」

「そう言えば荷物の事をすっかり忘れていた。……そこまで頭が参っていたとは、自分でも驚き。

「あ、ありがと。……じゃあそこに置いて行って」

「デコフフ www いつの訳にはいカンザキ・H・アアwww」

……？ 琉依が変な事を言い出す。……や、今更クオリティの低いギャグにツッコミを入れる気はないけど、持つて来たのが目的なのに渡さないって何なんだか。『イツの言つている事は相変わらず理解出来ない。

「意味分かんない。そこに置いて行ってくれるだけで目的達成でしょ？ 何で寄越さないのよ。そこで反抗する理由あるの？ 私は一人になりたいの。早く荷物置いて出て行つてよ。」

「拙者は『梨羽殿に』荷物を届けに来たで『ざる www 部屋に置いて行つたのでは』ミシションコンプリートとはならんで『ざる www 従つて、きちんと荷物を『受け取つて』下さらねば拙者はこの部屋から出られんで』ざる www」

「…………」

「…………もつ本当に分からない。ベッドからジト目で抗議するが、ドヤ顔のオタクブタは何か変な信念があるのか一向に部屋から出て行こうとしない。ああもう面倒臭い。何だつて『イツは』いつ…………」

「分かったわよ、受け取ればいいんでしょ受け取れば。用が済んだらさっさと帰つてよ？」

仕方なく、私はベッドから身を起こす。『イツに』いつまでも居座られたら困るし、やくつと言つ事聞いて追い払おう。一応荷物を持って来て貰つた恩はある訳だし。

因みにこの荷物というのは通学用のバッグの事で、弓道用具の事ではない。そつちは無意識ながらきちんと持ち帰つていた。……ま

あ、着替えまでは頭が回らなかつたから学校から道着のまま帰つて来たのだけど。冷静に考えると心ここに有らずな精神状態の道着姿の女子高生とか、かなり高レベルの不審人物だつたろうな、私……。

いつもながら無駄にニヤニヤしている琉依の顔を極力視界に入れないようにしながら、目的のバッグだけに手を差し伸べると唐突に手を引っ張られて

「わふっ！？」

突然、目の前が真っ暗く染まって何も見えなくなつた。

「ちょっと……な……！？」

頭が動かない。動かないのではなく、物理的に押さえつけられていて動かせられない。あまりの出来事に混乱しかかるが、この顔に当たる奇妙な弾力のある感触と後頭部を押さえつけている力強さなどの状況を鑑みると一つの結論に到達する。そう、私は

琉依に抱きしめられたのだ

「ちょっとー！ 何してくれてんのよアンタはー！ キモイー！」

臭い！－！ 鬱陶しい！－！ 早く離しなさいよ－！ 私にこんな事して、覚悟は出来てんでしょうなー？」

「……………」

私は琉依の胸に顔を埋めるような状態で抗議する。が、琉依は一向に離そうとしない。結構な勢いで暴れているのに、全く振り解けない。昔から身長が高かったけど、今は何の運動もしない筈なのに妙に力強く正直驚く。……あんまり意識してなかつた、というかわざと皿を背けていたけど、やっぱりコイツも男の子なんだ……。

「何よ……何なのよ……どうしてこんな事してるのよアンタは……もう全然理解出来な……」

「だつてお前、オレの顔なんて見たくなえだろ？」

「ツ……………！」

突然琉依の口調が一変する。いつもの『拙者』なんてふざけた一人称でもない。その喋り方は昔の……大好きだったあの頃の琉依そのもの。声は流石に昔と違つて低くはなつていて、心の芯に響くトーンは変わつていない。何故か安心するような、同時に心臓が飛び出しそうなくらいこづキリとした。

「全部……全部アンタの所為なんだから…………私がイライラするのも、射に違和感があるのも、ケガして大会に出られないのも…………全部……全部…………」

頭が熱を帯びて、身体も熱くなつて、もう何がなんだか分からなくなつた。本当はこんな事思つてないのに、堰を切つたように口を

突いて言葉が溢れ出す。自分の不幸を他の何かの所為にしたがっている。それを今、格好の捌け口である琉依に不条理にぶつけてしまつていて。『これが私の弱さ……なのかも。

「……そうだよ、それもこれも全部オレ所為。オレがヲタ化しちまつたのが原因だよ。オレがしつかりしてれば梨羽がこんなに思い詰めなくとも良かつたんだ」

「…………」

「……でもお前が欲しいのはこんな言葉じゃねえだろ？ オレに責任を押し付けて楽になれるんなら幾らでもしてくれて構わない。オレがヲタ化して梨羽がイライラしてるとも事実ではあるしな。でもそれじゃ心は空虚なままだ。何の解決にもなりやしない」

その言葉で、急に思考がクリアになる。頭から冷水を掛けられた氣分だった。

「……ツ、アンタに何が分かつ……！」

「分かるよ。お前も知つての通り、昔オレも同じ目に遭つてるからな」

「…………」

全て見透かされていた……。私は琉依の事全然分からぬのに、琉依は私の事を分かつてくれている。

琉依は心なしか、懐かしむように言葉を続ける。

「あの時は凹んだなあ……。バスケが出来なくなつたのもそうだけ

ど、梨羽に何も言つてもらえなかつたのが何気に一番効いたんだぜ?
? あん時はオレもまだガキだったしな

「う……う、『メン』

「いやいや、昔の話だ。オレも荒れてたし、そんなんで慰められようなんて虫のいい話だつて。……だからさ、ケガをした梨羽を放つて置けなかつた。オレと同じようになつて欲しくないからな」

「あ……」

その言葉で、数年振りに琉依の本質を垣間見た気がした。幾ら風貌が変わらうとも、趣味が、口調が、関係が変わらうとも、琉依は琉依だ。私の事を思つてくれて、私を見ていてくれて、私の欲しい言葉をくれる。その在り方は昔と何ら変わりない。心にあつた何かがストンと落ちたような気がした。

「ケガして大会に出れなくなつたのは残念だけど……それで梨羽の人生が終わつちまつた訳じやねえだろ? ケガも大した事なさそうだし、その気になりやあこれからだつて幾らでも弓道出来るだろ?」

「…………」

「梨羽は強い子だ。こんな小さな事で躓いたりはしないだろ? 」「道だけが、大会に出る事だけが梨羽の全てじやない。梨羽は梨羽だ。たかがケガ一つ程度で潰れるなんざ許さない。梨羽はいつだつて一生懸命で、輝いていて、皆の憧れにまで成れる女の子だつた筈だ。そつだる?」

「うん…………うん…………つ」

「オレはいつでも梨羽の傍にいる。誰が梨羽を貶めようと、オレはいつでも梨羽の味方だよ。今のオレなんぞ頼りないかも知れないと、昔そう約束したからな」

「…………る、…………るー…………くん……」

「へへっ、久し振りだなその呼び方。辛い時は吐き出したつていいんだよ。誰も咎めたりはしない。その為にオレは今、ここにいるんだから。我慢なんですねんな。オレに遠慮なんてしてくれるなよ？ オレ達は……『幼馴染』なんだから」

「…………ゴメン、ちょっとだけ…………ちょっとだけ泣いてもいい…………？」

「ああ、いいよ。ちょっととと言わば存分泣け。泣いて泣いて、涙が枯れたらまたいつも梨羽に戻ればいい。それまでは……離さないでおいてやるから」

「うん…………うん…………ぐすつ…………う…………うわあああああああああ…………ーー…………るー…………ううううううううん…………！」

堪えていたものが溢れ出す。大会に出れなくなつた悔しさ、大事なものを失つた虚脱感、そして…………胸に沁みる琉依の優しさ。自分でも分からないくらい色んなものが涙となつて流れ出て、琉依の胸を濡らして行く。流れた涙の分だけ、心が、身体が軽くなつていくような気がする。

気付けば私は、泣きながら笑っていた。涙でぐしょぐしょになりながら、それでも口元だけは緩んでいた。顔は琉依に押し付けたまま、何年か振りに心の底から笑つていた。琉依が変わつてしまつたと思い込んだあの頃から、いつだつて本気で笑顔になれた事なんて

ない。それがこんなにも簡単に、呆気なく、じく自然に。笑わなくなつた理由が琉依なら、笑う理由もまた琉依なのだ。やはり私の中で……琉依はこんなにも大きな存在だった。そんな事を今更ながら、琉依の腕の中で思い知らされた。

夢が散り、絶望に打ちひしがれたその先に、暖かな光が差した。それはきっと、希望という名の道標。その確かな温もりを感じながら、私は再び自らの足で歩き出す決意を胸に刻む

【願いと希望のヒューローグ】

「んで wwwwwwんで wwwwwwんで wwwwwwにやーんで wwwwww」

「…………」

翌朝。いつものように朝練……は出来ないから少しだけ遅く起きていつもの時間に訪れたのは、これまたいつものように異空間化した魔境。色とりどり云々な部屋の主は、これまたいつものように濁声を心地良さげに響かせていた。……さて、昨日のアレは幻だったのか何なのか。夢オチは既に一回やっているからこれ以上は勘弁して頂きたい所。

「おお wwwwww梨羽殿 wwwwww毎朝大儀で」ざわる wwwwwwクポオ wwwwww

そう私に声を掛ける肥えた物体Xはいつもと変わらない言い回しでニヤニヤしている。昨日の件で部屋に入るのに少し勇気が要ったのだけど、そんな私の緊張や期待を見事に裏切るオタク豚。……もう色々信じられない。

「あー…………そりよね、アンタはそりこりやッよね。期待した私がバカだつたわ…………」

額に手を当てて嘆息一つ。残念な氣も少しするけど、これが今の琉依なのだから仕方がないと言えば仕方がない。そんな気持ちとは裏腹に、まだちょっと痛む指先が昨日のアレは夢でも幻でもなかつた事を物語っている。

「ツ…………！」

……それで思い出した。私は昨日、男の子の胸に顔を埋めて子供みたいに泣きじゃぐつたのだ。頬がかあーっと熱くなるのが分かる。……くつ、アレって実は一生の不覚だったんぢゃないだろうか……？

「フォカヌプウ　ｗｗｗ顔が赤いで、」ざるよ梨羽殿　ｗｗｗ風邪で、」ざるか風邪で、」ざるか　ｗｗｗ？」

「う、うひちい！！　変な所に気が付かなくていいのよアンタはつ……」

顔を背ける。……ヤバい、本当に一生の不覚っぽい。琉依が周囲に言い触らすとは思えないけど、何となく優位に立たれたようで居心地が悪い。「、」この劣勢を覆すには……あ、そうか、簡単な事だつた。ふふふ……何でこんな単純にして最良の案に気づかなかつたんだろう。もっと早くからやつておけばべきだったんだ。むしろそつちの方が不覚。

「……な、何か邪悪な微笑みが見えるぞ、」ざるよ梨羽殿　ｗｗｗ何を企んでいるで、」ざるの　ｗｗｗ？」

うつかり零れた私の笑みに何か不吉なものを感じ取ったのか、僅かにたじろぐ琉依。そんな様子を氣にも留めず私は左手を腰に当て、右手で琉依をビシッと指さし、そして

「アンタをオタクから卒業させるわ！　何処へ出しても恥ずかしく

「いい、私の幼馴染として立派に更正してあげる！これから厳しくビシバシじごくからねつ！ 覚悟なさいっ！…」

きっと何者にもなれないお前達に告げる、とでも言わんばかりの勢いで、高らかにそう宣言した。……いや、何の事だか分からぬけれど。

卷之三

琉依はバカみたいな顔で絶賛絶句中。まあ琉依の同意を取る気はないから、別に納得していようがしていまいが関係ない訳で。

「まさかその体型と一キロね。朝晩は私と一緒に5kmのジョギング！お菓子は勿論禁止！食事はおばさんと相談して低カロリーメニューに変えるから……！」

卷之三

「明日は……大会に顔出さなきやいけないから、明後日の日曜日に
はこの部屋の大掃除！ 私がいらないと判断したものは全て捨てる
！ その棚に並んでるお人形なんて以ての外！ マンガ・ゲームの
類は明後日までに出来るだけ減らしておきなさい！！」

「ええええええええええええ！？」

「それと、音楽の趣味も変えなさい！」
野力ナ、加藤 リヤぐらいね！！

ちよ、ちよつと待てって……！ そもそもオレ、その辺の歌には
強い拒絶反応が……！」

「そう？ だったら特別にAK
私も鬼じゃないからね」
48ぐらいまでなら許してあげる。

「ああ、それならまあ何とか……つて、そういう問題じやねええええええ——！ 勝手に話進めんなああああああああ——！」

「アンタ気が動転しそぎて口調が元に戻ってるわよ？」

「どうでもいいわそんな事!! 一体何の権限があつてそんな横暴な……！」

「この可愛い幼馴染の梨羽ちゃんが、わざわざアンタを真人間に庾してやろうと一肌脱いあげるつて言つてんのよ。手取り足取りね。感謝されこそすれ、逆ギレされる謂われはないと思つんだけど？」

「ひ、一肌……手取り足取り……つ、ついでに腰も取つて頂けると
デュフフwww」

「口悪い事考えたら殺すわよ？」

「じょ、冗談だつて！！」冗談だから弓を仕舞えつ！！

「そんな訳で、今朝はもう時間がないからジョギングは今夜からね
！　さてと、朝食とお弁当のメニューをおばさんと相談しなくつ
ちゃ！　これから忙しくなるよーーー！　……あ、遅刻するから早く
降りて来なさいよ。」

「おいー！ まだ話は………！」

何か言い掛けている琉依を放置して、部屋を後にする。ドアを後ろ手に閉めた私は、自然と笑みを浮かべていた。これから事を考えて楽しんでいるのかも。不思議なくらい心が浮かれている。……ふふふ、私も昔とあんまり変わってないみたい。

「おばやーん！ ちょっと相談があるんだけどーーー！」

胸を弾ませるのは、表情を綻ばせるのは、思い出かそれとも希望か。遠い日の約束、後悔した過去、決意の昨日、そして続けて行く未来への道。共に歩く人は少し頼りないけど、その辺はお互い様だろう。まあ別に無理をする必要なんかない。私達のペースで、楽しく進んで行けばいいんじゃない？ そんな事を想いながら、私は足取り軽く林原家の階段を駆け降りる。

そんな訳で、少し短いけど私達の物語は取り敢えずこれにて閉幕。見守ってくれてありがとう。あの気紛れな作者の事だからまた何処かでお会い出来る日があるかも知れないけど、その時は宜しくね。

願わくば、皆様にも心に灯るような大切に出来る出逢いがありますように

【願いと希望のヒエローグ】（後書き）

いつも、新夜詩希です。この度は拙作を読んで下さりありがとうございました。

……「この程度の文量書くのにどんなだけ掛つとんねん」というシックハリを頂きそうですが……それでもどうにか書き終えたといつ事で許してください。

贅否両論ありますようが、これを読んで皆様が何か感じて頂けたら、それだけで幸いでござります。その何かを感想として送って下さればたら次回作への糧ともなりましよう。お暇でしたら、是非ご一筆。

それでは、次回作でまたお会いしましょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563p/>

幼馴染……それは綺羅びやかな出逢いと雅で甘美な思い出に染められた大切に

2011年11月24日12時50分発行